様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０１２０

研究課題名（和文）大航海時代後の美術における他者像の類型・系譜とその象徴的機能

研究課題名（英文）Images of the Other after the "Discovery"

研究代表者
岡田　裕成（Okada, Hiroshige）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：００２４３７４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スペインの植民地を中心とする新大陸の先住民像に焦点を当て、その類型と系譜、社会的機能を明らかにしようとするものである。ペルー、メキシコ、およびヨーロッパ各地で調査をおこない、そこで得られた作品および一次資料の分析に基づき、その表象が、自然科学的探査の成果と、古代のテクストなどの典拠に由来する人文主義的関心の双方に依拠して構築されたことを明らかにした。またその人工的なイメージは、植民地の先住民の自己表象の形成に重大な影響を与えたこと、先住民エリートの植民地社会への適応を演出する図像的な装置の役割を、祝祭などの場において果たしたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the images of indigenous inhabitants in the New World, especially in the Spanish colonies, this project has tried to elucidate the types of those images and the historical transition while considering its symbolical function in the society. Basing on the iconographical and archival materials I found through the research carried out in Peru, Mexico, and some European countries, this program shed new light on the formation process of those images oriented by both the result of scientific expeditions and the humanistic interests based on the classical texts from the antiquity. This research also figured out how these artificially invented images influenced on the formation of the self-image of the indigenous inhabitants in the colonies, while discussing its social function in the occasions such as colonial pageant as an iconographical device to appeal the adaption of the indigenous elite to the colonial rule.

研究分野：美術史

キーワード：アンデス　メキシコ　植民地　美術

１．研究開始当初の背景

アメリカ新大陸は、16 世紀前半にその主要な部分がスペインによって征服されるとともに、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス各国もまた、独自に探検と進出を試みた。また、この「新発見」の大陸は、オーストリアのハプスブルク宮廷や、フィレンツェのメディチ宮廷におけるキュリオ（珍品）蒐集の文脈で、強い関心の対象ともなった。そうした中で、アステカやインカなど滅ぼされた王国の君主像や歴史や風俗のイメージ、あるいは「未開」の地に生きる人びとの姿や自然景観は、地図・紀行書の挿絵や版画、宮殿などの装飾美術や祝祭の演し物、独立のタブロー作品などの多様な媒体を通して、盛んに図像化された。

新大陸に関わるそれらの図像については、「発見」から五百周年にあたる 1992 年頃を中心に、いくつかの大がかりな展覧会が開催されると同時に、多くの関係史資料が公にされた（Rachel Doggett ed. Exh.Cat.: *New World of Wonders. European Images of the Americas 1492-1700*. Washington, D.C., 1992. など）。また、ラテンアメリカ植民地美術史においても、征服後に多様なかたちで描かれた先住民像や新大陸主題の作品群は、研究の重要な焦点となった。近年では、メキシコにおける先住民イメージやインカ王像を取り上げた、重要なモノグラフが、相次いで公刊された（Elisa Vargaslugo, et al. *Imágenes de los Naturales en el arte de la Nueva España. Siglos XVI al XVIII*. México, D.F., 2005; Tom Cummins, et al. *Los incas, reyes del Perú*. Lima, 2005.）。

こうした一連の研究の中で紹介された多くの図像と関連資料は、今日に至るまでこの分野の研究の基盤となっている。しかしながら、主に歴史や人類学の専門家の手で進められたヨーロッパ側の新大陸表象についての議論は、イメージの詳細な分析に基づくよりは、「文明と未開」といった論理の枠組みに依拠した、やや図式的な解釈にとどまりがちであった。

たほう、植民地美術史の側からの研究は、メキシコ、アンデス各副王領における個別的な文脈に立脚するものであるがゆえに、類似の主題系に属するヨーロッパ側の図像文化との相互参照的な関係性や、メキシコ、アンデス両地域における並行的な現象は、必ずしも十分に研究されていない。

これに対し申請者は、2000 年度以降続けてきた中南米各地での実地調査の成果を踏まえつつ、特にこの数年は、新大陸先住民像とそれに関わる多様なイメージについて独自の研究を進めてきた。その中で、ヨーロッパ側で産出されたエキゾティックな新大陸表象が、その対象たる先住民の側にも受容され、時に屈折したかたちで彼らが描き出す自己の像に取り入れられてゆく過程を明らかにし（拙論 "Inverted Exoticism? Monkeys, Parrots, and Mermaids in Andean Colonial Art." In Exh.Cat.: *The Virgin, Saints, and Angels: Latin American Paintings 1600-1825 from the Thoma Collection*. Cantor Center for Visual Arts - Stanford University, 2006; 齋藤晃と共著『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋大学出版会，2007)、また、メキシコの布教区修道院壁画と、フィレンツェ・メディチ家の宮殿装飾の意外な類似から、先住民像を介した新大陸とヨーロッパの図像文化の相互参照を詳細に示した（拙論「新大陸植民地における美術の移植 ヌエバ・エスパーニャ 16 世紀布教区修道院の装飾壁画をめぐって」『西洋美術研究』14 号 2008)。

さらに、植民地時代のインカ王像についても、その歴史的系譜を詳しくたどるとともに、インカ王国を古代ローマとなぞらえる先住民エリート層の特異な歴史観が、その図像の展開に深く関わっていたことを解明した（拙論「インカ表象の創出と所有 植民地アンデスにおけるイメージの政治」『他者の帝国インカはいかにして「帝国」となったか』世界思想社，2008 所収；拙論．"<Golden Compasses> on the Shores of Lake Titicaca: The Appropriation of European Visual Culture and the Patronage of Art by an Indigenous Cacique in the Colonial Andes [講演]. The Hispanic Institute, Columbia University, 2010）

本研究は、申請者のこうした研究成果を出発点として、包括的な議論に乏しかった、新大陸先住民とそれに関する一連の図像文化について、領域・地域横断的な分析をおこなおうとするものである。

２．研究の目的

大航海時代の後、ヨーロッパのヘゲモニーを前提とした、近代へと至る世界規模の文化間交渉の枠組みがしだいに形成された。この時代の美術において、非ヨーロッパ人の姿をあらわしたイメージは、しだいに重要な主題系を形成するようになる。本研究は、スペインの植民地を中心とする新大陸の先住民像に焦点を当て、その類型と系譜を明らかにする。

同時に、「発見」された他者の像として、あるいは、他者の役割を与えられた自己の像として、それら先住民像がヨーロッパ、新大陸植民地双方の受容空間において、どのような象徴的機能や意味を担ったのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究が、「発見された他者」としての新大陸先住民と、それを取り巻く図像について解明しようとする課題は、次の２点に集約される。

１，類型・系譜の解明：　新大陸先住民とそれを取り巻く図像は、１）ヨーロッパからの旅行者、調査使節に随行した職業的な画家たちが描いた絵画イメージと、２）宣教師や植民地政府らの求めにより、先住民画家が挿絵入り文書などのかたちで作成した絵画イメージのふたつの系統に大別してよい。ただし、これらは時に混淆し、さらには、ヨーロッパにおいて古代中世を通して受け継がれた、地誌的寓意像や半ば空想的な遠方の他者の表象が、先行する類型として下敷きにされることがあった。本研究は、こうした理解を前提として、新大陸先住民図像の基本的類型と、その形成・変容の通時的過程を詳細に跡づける。

２，象徴的機能の分析：　新たな主題モチーフの領域としての新大陸先住民像は、大別するならば、スペイン（ヨーロッパ）系、先住民系のふたつ相異なる主体の相互的な関与のもとでつくり出された。それらイメージは、植民地統治者側にとって、自然学やエキゾティックな好奇心の対象として記録画的な機能を担った一方、とりわけ君主像については、征服した王朝の継承を視覚化する道具立てとして政治的にも利用された。

たほう、西洋風様式に則って確立したそれら君主像の類型は、先住民社会の側でも、特にそのエリート層がみずからの伝統的権威を誇示する場で巧みに用いられた。本研究はこうした問題を、上の第１の課題の成果にも照らしつつ、1）征服に続く時代に制作されたアステカ-インカ君主・戦士図像（イスミキルパン修道院先住民戦闘図壁画，ムルア手稿インカ王像挿絵など）と、2）植民地時代成熟期に制作された先住民君主・首長像（アコマヨ[ペルー]のインカ王像壁画，クスコ派先住民首長肖像画群など）の二つの領域おける代表的作例に着目することで、その制作の経緯と受容のありようを個別的に解明する。

４．研究成果

本研究は、スペイン植民地を中心とする新大陸の先住民像に焦点を当て、その類型と系譜を明らかにしようとするものである。この目的に基づき、平成 23 年度はメキシコに出張し、１）国立文書館、国立人類学博物館文書館において、植民地先住民の紋章図像に関する資料調査、２）イスミキルパン、アクトパン、クアウティンチャン、テカマチャルコなどにおいて宣教修道院の美術装飾に関する実地調査をおこなった。その収集資料を中心に、新大陸植民地に関わる図像文化における他者像の類型・系譜とその社会的機能の系統的分析を進めた。

その結果、１）1538 年にメキシコ市において、先行詞と先住民首長の協力関係に基づいて制作された「聖グレゴリウスのミサ」の羽モザイク聖画が、当時ヨーロッパで論争となっていた「先住民の理性」に関する解釈において、先住民の立場を擁護するイメージ操作の一環をなしていたこと、２）そのイメージ操作が、征服後の先住民が積極的に乗り出した紋章の獲得と、その図像による自己像の構築と軌を一にすること、さらに、３）こうした先住民の関与する美術の中核に、イスミキルパンなどの宣教修道院の壁画装飾図像が位置することを明らかにした。

平成 24 年度はペルーおよびスペインに出張した。

ペルーでは、クスコ文書館において、植民地時代インカ貴族の美術品収集について、リマ国立文書館において、植民地時代リマの特権層の財産目録における美術品収集に関する記録文書を収集した。

スペインでは、インディアス総合文書館（セビーリャ)、マドリードのアルバ公爵家文書館、ラサロ・ガルディアーノ美術館図書館、国立図書館、アメリカ博物館において、植民地時代先住民首長およびスペイン人征服者の 紋章図像に関する史料調査と、関連作品の調査を行った。その結果、植民地時代初期の先住民首長・征服者の紋章図像およそ 300 点を確認することが出来た。また、それらの紋章授与をめぐって、先住民首長らが本国スペインの王権に対し、どのような交渉を展開したのかについても具体的な事実関係を知る史料を発見した。さらに、これらの史料を、中世末スペインの紋章授与文書と比較することで、こうした先住民首長の行動が、中世以来のレコンキスタ時代を通して、スペインに確立した貴族認証の制度をなぞるものであることを明らかにした。

25 年度はクラクフ（ポーランド）およびマドリード（スペイン）に出張し、史資料調査を行った。

クラクフでは、ヤギロン大学図書館において、アルベルト・エクハウトの手になるブラジル先住民に関する未公刊素描の調査を行った。その詳細な分析を通し、「民族誌的素描」ともよばれるイメージ群が、対象の精密な観察に基づく写実的描写に基づく一方、類型的な他者像の図像要素を織り込んでいる点を明らかにした。またマドリードでは、前年度に引き続き、新大陸の先住民首長の紋章についての調査をおこない、その図像に、スペイン本国において類型化された新大陸と先住民のイメージが取り入れられていくプロセスを詳しく検証した。

以上３年にわたる調査を通し、本研究は当初の計画通り、ヨーロッパおよび新大陸において征服以降形成された先住民像について、アステカ、インカの君主像、首長像、戦士像を中心として、画像資料の包括的な資料整理を完了した。

また図像群の制作と需要に関する情報の収集を通して、それらがヨーロッパ側・先住民側双方の相互作用の元で形成されたことを解明した。しかもそれは、たんに図像の操作というにとどまらず、様式・技法の選択に付随する「民族性」の表示機能をも意識したものであった。たとえば、上に見た《聖グレゴリウスのミサ》では、「理性を欠く存在」すなわち「自然奴隷」としてのインディオ像が本国において論じられていることを認識した先住民エリートが、「羽根モザイク」という征服以前からの造形技法を用いて高度な神学的理念を表現することで、「理性ある（＝キリスト教を理解しうる）インディオ」という自己表象を作り出したのだ。

たほう、先住民首長の紋章図像が示すのは、彼ら被征服者エリートが、征服者の側によって「他者像」として作り出された先住民イメージを積極的に受け入れ、自らの社会的生存をはかったことである。たほう、征服者の側は、先住民君主の像を操作することで、征服以前の歴史を征服後の統治と接続しようとした。こうした図像の構築と行使には、文化境界上の自己／他者表象に特有ともいえる社会的機能が観察される。この機能は、とりわけ都市祝祭のような非日常の空間においてとりわけ効果的に発揮されるが、この点は今後継続して調査研究を進めたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
岡田裕成　「『せめぎあうヴィジョン～スペイン植民地世界』展」　『西洋美術研究』　査読有　18 巻　2014　pp.210-217

岡田裕成　「グアダルーペの聖母像　歴史の変転がつくった『民衆の聖母』」　『月刊民博』　査読無　35 号　2012　p.15

〔学会発表〕（計　２件）
岡田裕成　「『受容』から『操作』へ　征服後メキシコの先住民エリートと宣教の美術」地中海学会　2013 年 6 月 16 日　同志社大学

岡田裕成　「エル・グレコ、歴史意識、マニエラ」　2012 年 1 月 21 日　エル・グレコ没後 400 年記念シンポジウム　早稲田大学

〔図書〕（計　５件）
Jonathan Brown, Luisa E. Alcalá, 岡田裕成他 4 名　*Painting in Latin America 1550-1820*. New Haven: Yale University Press, 2015, 477 pages (pp.403-435)

Jonathan Brown, Luisa E. Alcalá, 岡田裕成他 4 名　*Pintura en Hispanoamerica 1550-1820*. Madrid: El Viso, 2014, 477 pages (pp.403-435)

岡田裕成　『ラテンアメリカ　越境する美術』筑摩書房　前 350 頁

岡田裕成他多数　The Atlas of Site-Specific Art: North and South America. London: Phaidon Press, 2013, 373 pages (pp.332-333)

岡田裕成　「自己／他者の表象をめぐる闘争　征服後メキシコの先住民エリートと文化境界上の美術」　『コンフリクトのなかの芸術と表現　文化的ダイナミズムの地平』　大阪大学出版会　全 372 頁（3–39 頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
岡田裕成研究室ウェブサイト：
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okada/ahs/

６．研究組織
(1)研究代表者
岡田裕成（OKADA, Hiroshige）
大阪大学・文学研究科・准教授
研究者番号：　00243741